

地域社会で支えたい子育て世代



核家族化や孤立化により 育児不安に悩む家庭

全国で増え続ける児童虐待件数。出雲市でも同様の状況があります。そして、主な虐待者のうち実母が一番多いのが気になります(下表のとおり)。核家族化や孤立化が進み、育児不安を一人で抱え込んでいる実態があるのかもしれない。

子育てには、悩まない親はいないと言ってもいいくらい、不安がつきまとうものです。市では、子育て中の若い世代の家庭は社会全体で支えることが大切と考え、さまざまな相談機能の充実や親子で交流できる場所の提供に努めています。

子育て世代が求める 地域社会との関わり

子育て相談や親子で遊べる場として、子育て支援センター(市内9か所)があります。また、生後4か月までの乳児がいる家庭には全て、「あかちゃん声かけ訪問員」が訪ね、子育ての情報を提供しています。



いすも子育て支援センター(塩冶町)の音楽遊びの様子。ここでは、年間延べ約2万人の親子が訪れ、子育て情報を得たり、交流したり、子育て相談・健康相談を受けたりしています。子育て中の家庭は、上手にご利用ください。

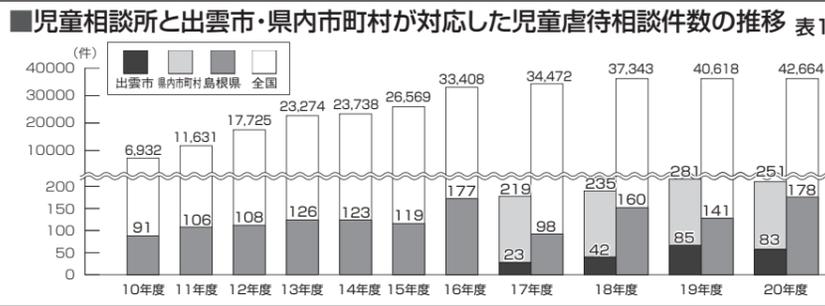
日本の将来を思うとき、子どもたちが健やかに、夢と希望を持って育つことは、だれもが願うことです。そんな願いを裏切るかのように、児童虐待という子どもたちの将来を真っ暗にしてしまう痛ましい事件が跡を絶ちません。

11月は、児童虐待防止推進月間です。子どもたちにとってよりよい社会環境をつくるために、私たちにできることは何か、みんなで考えてみましょう。

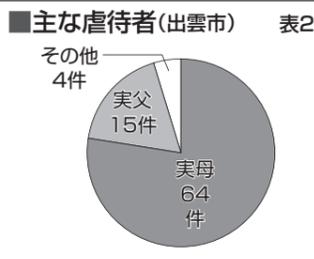
与えることにつながります。社会全体で子育てをする意識をみんなが持たたいものです。

市の児童相談窓口は
少子対策課 ☎66004

平成20年度 児童虐待の現状



※17年度から出雲市に虐待相談窓口を設置



(注)
①児童福祉法改正により、平成17年4月から市町村において、児童家庭相談窓口を設置している。そのため、県内市町村対応件数は、平成17年度から数字を計上。
②県内市町村が対応した件数と、島根県が対応した件数には重複あり。(重複件数/平成17年度41件、平成18年度80件、平成19年度63件、平成20年度110件)

12人の子どもを育てる肝つ玉かあさんに聞く、子育てと人生

東京都八王子市に住む坂本洋子さんご夫妻は、里親として、さまざまな事情で産みの親と暮らせない子どもたちを受け入れ、育てています。

これまでに受け入れた子どもは、12人。心に傷を持った子どもたちが、坂本家の温かい家庭では、こんなに心豊かに暮らせるのはなぜか。洋子さんに話を聞きました。

里親登録は 医師の言葉がきっかけ

問い 坂本家には、家庭の温かさを感じます。何がきっかけで里親になられたのですか。

坂本 20年前、医師から「お子さんを授かる可能性はない」と告げられました。そのショックは想像を絶するものでありましたが、夫と「子育ての道を断れた私たちなら、親に恵まれない子どもの気持ちをわかってあげられるかもしれない」と、里親登録をしました。

子どもはみんな違って それでいい

問い 初めて子どもさんを家に迎えられた日の気持ちと、その後について、お聞かせください。

坂本 我が家に子どもがやってくるといってワクワクする気持ちと不安で複雑でした。そして、子育てにあたっては、実の親子ではないことへの世間の無理解や偏見に悩み、気負いもあつて、大変な思いをしましたが、かけがえない出会いでした。

問い 今は、ゆつたりと子育てをされているようにお見受けするのですが。

坂本 4人目を受け入れたところから肩の力が抜け、「子どもは一人ひとりみんな違って、それでいい」と思えるようになりました。今は肝つ玉かあさんです。

子どもの健全な成長は 乳幼児期の愛情が大切

問い それらの経験から、子育てに関し思うことはありますか。

坂本 我が家の子どもたちは、産みの親と暮らせない事情があつて、うちにやってきた子です。みんな心に傷を負っているという点では虐待児でした。彼らの子育てをするうちに、気づいたことがあります。

乳幼児期にかわいがられていた子は、心に傷を負っても、安定した環境で育てると、曇っていた宝石が磨くと輝くように、情緒面や生活面で伸びてくるのです。幼児期にどこで過ごし、どれほど家族から愛情を受けられるか、些細なことのように、それは、子どもの健全な成長のための大きな要因となるようです。

問い 子育て中のご家庭に対しての大きなメッセージですね。

坂本 はい。最初に我が家によつ

てきた私たちの大切な長男は、悲しいことに17歳でオートバイ事故で亡くなりました。親思いのいい子でしたが、社会に適応できなかったことが、死を招いたようなものでした。

その子が亡くなった後、ある方が、彼が社会に適応できなかったのは「愛着障がい」と話してください。私の中のなぞが、一気に氷解していく思いがしました。産後の親との「愛着の絆」ができていかなかったのが原因だそうです。その子にもっと早く出会い、私たちが里親が「愛着の絆」作りを、早い時期からしていたら、彼は楽に生きることができたかもしれません。彼にもらった多くの思い出を大切に、彼にあげられなかったことを、我が家の弟・妹たちにしてあげたいと思っています。

社会への窓を開きたら
子どもは育たない

問い 子育て環境として、地域社会に望むことはありますか。

坂本 現在、我が家の子は、どの子も学校や地域で受け入れられ、幸せに暮らしていますが、

かつて周りの理解がなく、私たちが大変傷ついた時期がありました。でも社会への窓を開ぎしてしまつたら子どもは育ちません。子育て家庭が、うまく関わることでできる地域社会の必要性を感じます。

里親になることで知った 人生の意味

問い ご自身の人生を振り返りかえつて、どう思われますか。

坂本 私たちにとって里親になることは、夫婦の絆を深めることであると同時に、人生の意味を知るための道だったのかもしれない。子どもも成長するけれど、もつと成長するのは親の方だと思えます。これからも、生涯、家庭を大切に子どもたちと「育ちあい」の生活を過ごしていきたいと思えます。

里親とは 家庭の事情などで、産みの親と暮らせない子どもを自分の家に迎え入れ、養育する人のことです。関心のある方は、出雲児童相談所にお電話ください。
(☎210007)

オレンジリボンには、子どもの虐待を防止するというメッセージがこめられています。



9月に出雲市を訪れ、「愛の力で子どもは育つ」と題して、講演をした坂本洋子さん (出雲市民会館)